Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-04

子宮内胎児発育遅延の病態解明に向けて　-2SD未満のSGA児の周産期背景についての検討

藤岡, 一路 ; 森岡, 一朗 ; 橋本, 総子 ; 齋藤, 敦郎 ; 森川, 悟 ; 三輪, 明弘 ; 柴田, 暁男 ; 横山, 直樹 ; 松尾, 雅文

(Citation)
日本未熟児新生児学会雑誌,21(3):572-572

(Issue Date)
2009-10

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(Rights)
利用に関する注意：ご利用は著作権の範囲内に限られます。

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001702

★OP65

子宮内胎児発育遅延の病態解明に向けて～－2SD未満のSGA児の周産期背景についての検討～

神戸大学大学院医学研究科内科系講座　小児科学分野

藤岡一路　森岡一朗　橋本総子　齋藤敦郎　森川悟
三輪明弘　柴田暁男　横山直樹　松尾雅文

【背景】
本邦のSmall-for-Gestational Age（SGA）の定義は、現在、在胎週数における標準出生体重の10パーセンタイル未満である。一方、昨年に確立したSGA性低身長症の診断基準は、出生時の身長又は体重が標準値の－2SD未満である。SGA性低身長症に対する成長ホルモン治療にあたり、－2SD未満のSGA児の原因、出生時の体格の現状を明らかにする必要があるが、現在本邦におけるデータはない。

【目的】
当院における－2SD未満のSGAの出生時の体格およびその原因を明らかにすること。

【対象・方法】
2004年から2009年までの6年間に当院に入院した新生児のうち、出生時の身長又は体重が－2SD未満のSGA児148症例を対象に、在胎週数、出生時計測値、SGAの原因（児、胎盤臍帯、母体因子）について、診療録を用いて後方視的に検討した。

【結果】
148例のSGA児の内訳は、超早産児（＜28週）8例（5.4%）、早産児（28～36週）41例（27.7%）、正期産児（37～41週）99例（66.9%）であった。身長・体重ともに－2SDを下回ったのは75例（50.7%）、体重のみ－2SDを下回ったのは29例（19.6%）、身長のみ－2SDを下回ったのは44例（29.7%）であった。身長・体重ともに－2SD未満の症例の割合は、超早産児7／8例（87.5%）、早産児23／41（56.1%）、正期産児45／99（45.5%）であった。院内出生122例のIUGRの主な原因は、胎児因子28例（23.0%）、胎盤臍帯因子40例（32.8%）、母体因子37例（30.3%）、原因不明17例（13.9%）であった。複数因子を有する症例が31例（26.2%）存在した。複数因子を有する症例は、超早産児5／8例（62.5%）、早産児14／41（34.1%）、正産児13／99（13.1%）であった。

【結論】
当院における身長又は体重が－2SD未満のSGA児全体では、正期産児が66.9%を占めていた。しかし、全体の50.7%を占める身長・体重ともに－2SD未満の症例に関しては、早産児に多い傾向を認めた。また、IUGRの原因は、胎盤臍帯因子、母体因子の順に多く、複数因子を有する症例が全体の26.2%存在し、早産児ほど複数因子を有する割合が大きかった。